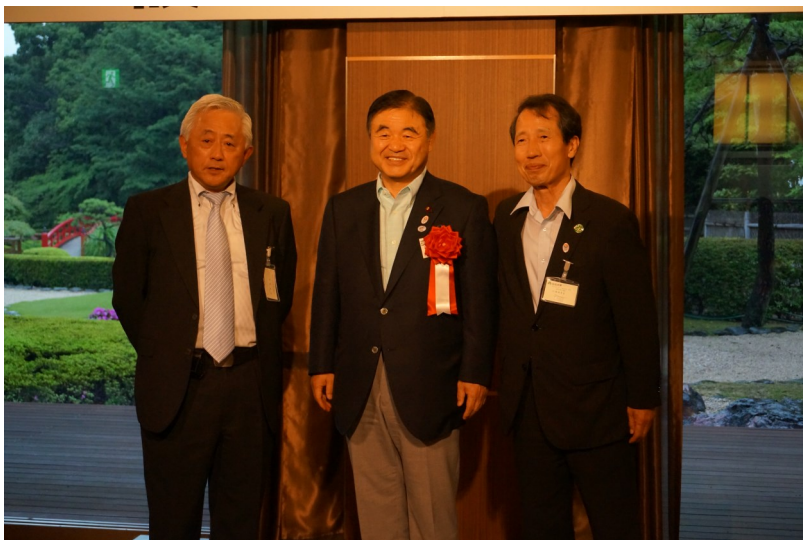


仙台大学 広報室



Monthly Report

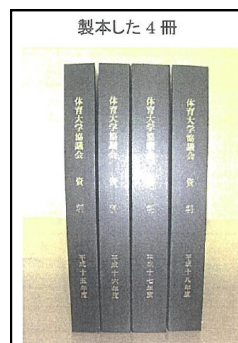
一般社団法人「全国体育スポーツ系大学協議会」 の法人化祝賀会に出席して



7月26日、東京のホテルニューオータニにおいて開催された一般社団法人「全国体育スポーツ系大学協議会」の法人化祝賀会に、阿部学長とともに出席した。昭和56年9月、体育系大学経営層の集まりである任意団体として、当時の設置基準改定による大学体育の選択科目化に対し必修維持を働きかける目的等で発足した体育大学協議会を、本年度、一般社団に法人化したものである。祝賀会では、松浪健四郎協議会会長(日本体育大学理事長)が、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた組織拡大および役割の明示・発信、スポーツ指導者に対する協議会独自の認定資格制度創設その他、法人化の意図について説明・挨拶の後、下村文科相や遠藤五輪担当相から祝辞を頂くなど、多数の出席者を得て盛会のうちに終了した。

仙台大学と同協議会との係わりでは、日本体育大学、日本女子体育大学、東京女子体育大学、大阪体育大学と並んで、発起人5大学の一つとして、発足当初から故矢作文男・前仙台大学理事長が協議会理事に就任し、当職が、引続き前年度末まで足かけ24年間、理事職に在任するとともに、今回の一般社団法人設立にあたっては、発起人理事の一人として参画している。その間、平成15年度から18年度の4年間、故野田敏彦・前大阪体育大学理事長の後を受けて協議会会長職にも就任し、協議会の組織拡大や歴史資料の製本作業、健康体力づくり事業財団との健康運動指導士養成等に係る連携その他を実施した。また、桑野豊、向井正剛の元学長ご両人が、ともに、任意団体の全国体育系大学学長・学部長会会長として協議会副会長に就任し、同協議会の維持・発展に貢献されている。

(仙台大学理事長・朴澤泰治記)



< 目 次 >

一般社団法人「全国体育スポーツ系大学協議会」の法人化祝賀会に出席して	1
2015 National Athletic Trainers' Association Convention	2
「海をなめるなよ！」 第35回仙台大学海浜実習の報告	3
CSULの留学生在「書道」に親しむ	7
復興願い「未来(あした)への道1000km 縦断リレー2015」に本学学生も参加	7
学生の競技結果等	12

学生の活躍や、取り組みをご存知でしたら
広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関
にも旬な話題を提供していきたいと考えて
おります。

本誌へのご意見・ご質問等がございましたら、
広報室までご一報ください。

広報室

TEL 0224-55-1802

FAX 0224-57-2769

Email:kouhou@sendai-u.ac.jp

スポーツを英語で語るキャンパス創り

"A campus for Sports Education through English"

—LET'S TALK SPORTS IN ENGLISH!—

2017年創立50周年

50 years Anniversary of Establishment in 2017



SENDAI UNIVERSITY Since 1967

SPORTS FOR ALL ～スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に～

2015 National Athletic Trainers' Association Convention ～ セントリスからの報告 ～



アメリカンセンター内受付前にて 左から朴澤理事長・鈴木新助手・白幡助教・和泉新助手・小野新助手・佐藤周平助教・パラング講師

米国中西部に位置するミズーリ州セントリスで全米公認アスレティックトレーナー（以下AT）の会員制組織であるNational Athletic Trainers' Association（以下NATA）の年次総会が開催され、そこに今回本学から7名の教職員が参加した。

NATAは1950年に設立され、現在では30,000人（内53%女性、47%男性）を超す世界的組織となった。6月24日・25日・26日の3日間の開催期間中に、世界中から約8,000名のアスレティックトレーナーが会場に集結した。8,000名もの参加者が一同に集まるため、アメリカンセンターといった東京ドーム1つ分以上の大きさの建物で開催された。会場に入るとまず受付が設置されており、登録した者とそのゲストのみしか参加できないようになっている。プログラムが配布され、同時にいくつも開催されている講義、ポスター発表や研究発表から選択して聴講する方式となっている。その合間には、業者が最新のスポーツ関連商品を展示し、試供品を配布する「展示スペース」で最新の商品についてリサーチすることも可能だ。



NATA会場内の様子



展示スペースの様子1

また、「Career Center」といって数多くの雇用情報をNATA年次総会で得る事が可能だ。新卒者の面接を年次総会会場で行う事も多々ある。たくさんのATが集結するため、各地区の代表者が集まる会議や、常任理事会なども総会中に実施されている。また、卒業した大学の同窓会なども開催され、人脈を構築しATの職域を広げ各々が向上しあう機会を提供するよう構成されている。



展示スペースの様子2

2015年年次総会で最も話題性があったトピックは「脊椎損傷選手に対する適切な対処法」についての合意書が改訂された事である。以前のAT教育においては、脊椎損傷選手に対してアメリカンフットボールなどで使用される防具（ヘルメットやショルダーパッド）を外すのは医療機関に搬送されてから行うべきで、必要のない限り取り外さないとされていた。今回の改訂では、3名以上トレーニングを受けたATがその場にいた場合はできる限りの防具を現場で取り外してから搬送することとなった。また、搬送時に使うバックボードについても詳しく説明されている。医療機関に勤務する職種の人々よりスポーツ器具の種類やその除去方法に特化した知識や技術を持つATに判断が委ねられる事になったようだ。

AT教育プログラムは全米で350以上存在しているが、2017年までにすべてのプログラムが修士課程に移行されることがきまった。これはATの地位向上とその教育内容を考えたときに修士課程が妥当であると判断されたからである。更には、ATの資格を保持するためにはエビデンスに基づいたスポーツ医学の講義に参加して単位を取得することが必須条件となった。このように、NATAは常に変わりゆく世界の情勢を敏感に感じ取り、会員に常に最新のスポーツ医学の知見を学ぶ機会を提供している。NATAのメンバーはグループとして力を結集する事によりATの職業のためにそれぞれが個人で出来る以上の事を成し遂げる事が出来るのだ。このような機会を与えてくださった朴澤理事長をはじめ、関係者の方々に深謝いたします。

<報告：助教 白幡 恭子>

「海をなめるなよ！」第35回仙台大学海浜実習の報告



平成27年度仙台大学海浜実習が、今年も山形県鶴岡市由良海水浴場で今月18日土曜日から20日月曜（海の日）まで2泊3日の日程で実施された。「海をなめるなよ！」で始まった「水泳実習」（当時の名称）も今年で35年目を迎える。今年は例年になく前日から台風の影響で悪天候に見舞われ、実習メニューが心配されていたが、やはり日本海を代表する海水浴場だけあって、我々の心配をよそに全ての課程を難なく消化する事が出来た。特に最終日の大遠泳では曇り空ではあったものの、水温もほどほど、波ひとつ立たない穏やかな海、絶好の遠泳日和となった。由良の海は最後まで仙台大学を裏切らなかった。最終的には全員が余裕を持って完泳する事が出来た。結果は同設定コースの中では最高記録である107分という実習最後にふさわしい有終の美を飾った。100人にも及ぶ編隊が水面の上で大きな群れと化し移動する様はまさに勇壮壮大である。よき指導を得て団結和協のもと、果てしなき未知の目標を達成しようとする若者の姿は何よりも美しいものである。「教師になって良かった・・・」と思うと同時に、本学学生（新生として）誇らしくさえ思える瞬間である。

今思い起こせば当時、地元宮城県をはじめ隣県の太平洋沿岸の海水浴場での実習は、7月中旬という事もあって東北の梅雨明け頃の天候は不安定で天気はもとより、気温や水温をはじめ、自然環境要因が中々実習条件に叶う事が少なく、水泳実習に関しては関係者が困難を強いられていた事を思い出す。野外スポーツ活動の成否は、ほぼ気象条件が鍵を握っていると言っても過言ではない。特に「海」という大自然を相手にする水泳となると、潮の流れや水温が重要な要因となる。宮城先生は実習の怖さを良く知っており、その事を誰よりも理解している。

そんなある日、冬季の実習がきっかけで当時担当責任者となった宮城先生に太平洋と日本海の海の違いを話すことがあった。結局実際の現場を二度（真冬と初夏）に渡ってみて頂く事となった。冬の日本海、そして翌年の初夏の海があまりにも違う姿に、宮城先生の驚きの表情が今でも印象的だった。

以来、仙台大学に入って来たほやほやの新生を迎えるべき体育系大学の「心構え教育」のスタートという事ではじめられた「水泳実習」（当時の名称）は、実に今年で35年。その間、実習中の事故は勿論のこと、始めは泳げなかった学生も全て脱落者無く見事完泳した。学生をはじめ、皆が充実感に浸れる唯一の体験となった。実習を終えた大学では何か学内の空気が大きく変わっていた事を思い出す。こんな気持ちを味わったのは私だけだろうか？そんな感動的行事が地元鶴岡市の話題となり学内にも徐々に浸透していった。

年を重ね大学の規模も大きくなるに従って、実習生の数も増えていった。実習スタッフは実技教員ではおさまらず、教科や職の枠を超え殆どの教職員が参加（大学が留守状態になり心配した程、笑！）、大学上げての実習となっていった。多い時には300人を超える大遠泳となったことも記録に残っている。同じ厳しさでも競技クラブの活動とはチョット違う、いわば総合訓練にも似た一種独特な教育だったのだと思う。まさに仙台大学生の基本姿勢を植え付ける事が出来る唯一の「教育事業」に育っていった。

このように徐々に本学の一つのムーブメントになって伝統行事と化し、今で言う本学の「建学の精神」、しいてはFD（ファカルティディベロプメント）GP（グランドポリシー）等の土台となったと言ってもよいのではないかな。

実は実習前夜に地元観光協会によるサプライズとして「歓迎兼35年感謝の会」が催され、会では当時の懐かしい思い出の写真やエピソードが映し出され、仙台大学の「実習35年の歩み」に花を添えて頂きました事を加えておきたい。また実習中は、毎年のように地元をはじめ隣県（新潟・秋田・仙台、他）の同窓生が数名顔を出し、思い出と懐かしさを取り戻しに来てくれる場面も見逃せない。本当に懐かしいんですね。「先生方年を取りましたね？」、「気合掛かってないんじゃないですか？」等と彼らに「はっば」を掛けられる始末（笑！）。最近では2泊3日とスケジュールも少なくなり、総勢100名規模のコンパクトな実習となってしまったが、今回の実習でも当初の「志」は変わらず、きっと仙台大学の精神を学生達に伝える事が出来たと信じている。



佐久間敏行先生（以下先生を省略）、熊坂繁太郎、佐渡一郎、小島淑子、北村 仁、佐藤信重、森 富、向井正剛、佐藤佑、藤堂良明、日下裕弘、本多弘子、鈴木敏明、岡村輝一、春藤るみ、横川和幸、佐藤 久、佐藤幹男、中房敏朗、舟山正則さん、などなど・・・、（他在職中教員略）現在はお亡くなりになられたり、殆どの先生方が退職されている先生方だ。今、文字を打ちながら、それぞれのお顔を思い起こしている。この諸先輩・諸先生の協力なくして今までの実習は存在しなかったことは言うまでもなく、そこに参加して頂いた歴代からの補助学生の諸君の力の賜物だと感謝している。



とにかく一人一人が燃えていた。その燃えた先生方の姿を、彼らはしっかりと今でも忘れていない。自分自身の誇りの宝として。だから、いつまでもそれを私たち教員は忘れない。本当にみなさんお疲れ様でした。今回の実習の閉講式では全員が大海原に向かって指をさし「海をなめるなよ！」のエールを行った。

「海をなめるなよ！」で始まり「海をなめるなよ！」で無事終わる事が出来、35年目の海浜実習が幕を閉じた。大きな体で直立不動となった宮城先生、震えた嗚れ声とうるんだ目がとても印象的だった。35年間私たちを守ってくれた「由良の海」に心から感謝を申し上げたい。これからも他大学に類のない体育大学らしい「仙台大学海浜実習」の素晴らしき伝統がさらに発展し、受け継がれていくことを誇らしく願うものである。

<寄稿：文・児玉善廣 教授、写真・小松恵一 教授>

第2回 NPO法人日本スポーツ栄養学会(7月4日～5日)報告

滋賀県の立命館大学びわこ・くさつキャンパスにおいて第2回NPO法人日本スポーツ栄養学会が開催されました。

今回の大会のテーマは『QOL（生活の質）の向上にスポーツ栄養学ができること』でした。今大会の大会長である立命館大学スポーツ健康科学部教授の海老久美子教授からQOLの向上のために今回、「和」と「輪」と「環」の3つの「わ」をキーワードに、広げ、深める大会であるとお話をいただきました。「和」は日本の文化を意味し、「輪」は栄養面のニーズについて、また、人のつながりを意味します。「環」は人の体の中の活動を意味します。

多くの大学、企業から研究発表がありました。本大学からは、前年度と同様に早川公康准教授、岩田純講師が口頭発表を行いました。

岩田純講師により運動栄養サポート研究会の活動について、報告がされました。内容は昨年度から開始された新制度の運動栄養サポーターについてです。運動栄養サポート研究会の目標である「選手の競技力向上」を達成するためにも、サポート活動の質向上を目指して参ります。

今大会で報告された発表内容には、「集団に対する食事調査」、「体重の増減」など、運動栄養サポート研究会の発展に必要な内容が数多く報告されていました。

神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部の鈴木志保子教授による「スポーツ栄養マネジメントを理解しよう」をテーマにしたセミナーがありました。公認スポーツ栄養士に必要とされる栄養管理システムとして導入されている「スポーツ栄養マネジメント」に関し鈴木教授が実践してきたスポーツ栄養を通して教えていただきました。

本学の、運動栄養学科に設立された運動栄養サポート研究会は今年で13年目を迎えました。現時点で55名の学生が13種目の部活に対しサポート活動を行っています。

大会で学んだことを学生達に伝え、学生と教職員も運動栄養サポート研究会の向上に努めていきたいです。また、学生達にも学内の活動だけではなく、他の大学のスポーツ栄養に関する活動を知り、外部の活動に参加してほしいと感じました。学内に留まらず、外部が行っているスポーツ栄養を感じることで自分達の栄養指導力の広げていくよう願っています。

大会を通して私自身は、「選手とどれだけ向き合えるか」、「自分の時間を費やせるか」そして、「スポーツ栄養はアスリートだけではなくすべての人のためのある」これは仙台大学の基本理念であるスポーツフォアオールと近い理念だと考えます。これらの3つを基盤にアスリートへの栄養指導や学生の育成をして参ります。

以上、第2回NPO法人日本スポーツ栄養学会の報告とさせていただきます。

<報告：新助手 村上 昂>



岩田講師の発表の様子

テーマ：栄養士要請課程の学生が行うスポーツ選手の栄養サポート活動に関する研究（第4報）～栄養サポートのためのカリキュラムと制度の検討～

日本学校教育学会第30回研究大会



〔基調講演〕 憲法の国際平和と教育基本法の教員像を目指す教育対話
(前仙台大学副学長 京都光華女子大学副学長 若井彌一)

昨年8月に日本学校教育学会第29回研究大会が仙台大学で行われました。今回の第30回研究大会は、7月17日から3日間東京の目白大学を会場として開催されました。大会は公開シンポジウム、基調講演、記念講演、課題研究、自由研究などのセッションを設けました。本学元副学長若井彌一先生、昨年大会準備委員会委員長事務局長を務めた本学太田四郎、事務局長の高橋まゆみ先生、本学の牛志奎など数名の先生が大会に登壇しました。

(<http://www.gakkoukyoiku.com>)



〔公開シンポジウム〕 司会を務めた高橋まゆみ先生（本学客員研究員、前体育学部教授、国際交流センター長）

地球規模のグローバル化の進行は政治・外交、経済、教育、社会に大きな影響を与えています。そのため近年東アジアではどのような教育改革が行われているのかを検討するため、大会は「東アジアの学校教育——教育改革の潮流を中心に——」という課題テーマを設定し、基調講演をはじめ、韓国、台湾、および中国からの研究者がそれぞれの最新の話題を提供しました。



〔公開シンポジウム〕 牛志奎が衝撃的な写真とユーモラスな話で中国の激しい受験競争の現実を説明しています。



〔記念講演〕 みんな地球に生きるひと〜日本の国際化と子どもの未来〜（アグネス・チャン 歌手 陳美齡 日本ユニセフ協会大使）



〔自由研究〕 自由研究の発表、通訳・司会を務めた牛志奎と海外発表者および日本の研究者の記念撮影

＜文責：教授・太田四郎／教授・牛志奎＞

仙台大学生のための教採塾を実施—教師を目指す学生達の思いに込めて



仙台大学生のための教採塾の様子＝仙台大学

7月6日（月）、本学講義棟で「仙台大学生のための教採塾」＜主催：仙台大学教職支援センター／期間：平日・週1日（昨年11月～9月中旬まで）及び土曜・月2回（今年4月下旬～9月中旬まで）＞が実施され、「教師になろう」という強い志を持った本学の学生約60名が参加しました。教採塾では、教師を志望する学生に対し、「教員採用試験対策」の勉強会を行なっています。

この日は、本学の渡邊康男教授が、「特別支援教育」分野で出題頻度が高いと思われる内容を題材にしながら重要ポイントを確認。その後重要ポイントに解説を加え、わかりやすく説明されました。参加学生達は熱心に耳を傾け、メモを取っていました。

しおにゆうえみ

参加学生の塩込絵美さん（健康福祉学科3年一福島・会津学鳳高校出身）は「私は将来、小学校の教師になりたいと考えています。教採まで1年を切ったので、本格的に勉強をスタートさせるつもりです。教採まであらゆる準備を行ない、現役合格を勝ち取るために今から精一杯頑張ります」と話しました。

本学教職支援センター長の青沼一民教授は「教員採用試験合格は、非常に難しい状況であるが、最後まで踏ん張って、努力を重ねてほしい」と学生達に向けての激励の言葉を話され、「教員採用試験対策は、いかにして大学1・2年生の早い段階から本気にさせるかが肝要である。学生達が意欲を高めるような仕組み、仕掛けを工夫していきたい」と今後の展望を述べられました。

【本学で取得可能な教員免許状】

「中学校教諭一種普通免許状（保健体育）」・「高等学校教諭一種普通免許状（保健体育）」・「養護教諭一種普通免許状」・「特別支援学校教諭一種普通免許状」・「高等学校教諭一種免許状（福祉）」・「栄養教諭二種普通免許状」・「小学校教諭二種免許状」

（明星大学通信教育部との教育業務提携による）

本学とタイ・シーナカリンウィロート大学との国際交流協定の締結を更新



協定書を手を握手する阿部学長（左）とスプラニー学部長＝学長室

7月14日（火）、本学において仙台大学とシーナカリンウィロート大学（タイ）との国際交流協定の締結を更新しました。本学の阿部芳吉学長とシーナカリンウィロート大学のクアンブンチャン・スプラニー学部長が、協定書に署名を行ないました。同大学の学生の受け入れは、平成22年度より毎年実施しています。

また、スプラニー学部長は、現在、本学に留学中のシーナカリンウィロート大学の学生2名と面談し、本学での勉学の様子や日常生活を確認され、安心した表情を浮かべていました。

シーナカリンウィロート大学は、1949（昭和24）年、教員養成のための国立師範学校を母体に設立されました。現在は、幅広い学問系統を持つ総合大学になっています。本学とは、平成21年1月7日に国際交流協定を締結。平成21年には、シーナカリンウィロート大学の教員が、本学の教育資源の研究や本学教員による指導を受けることを目的に来学されました。

国際交流協定の更新後、両大学間の連携がより強化され、教員および学生の活発な学術交流がますます発展するような更なる取り組みが期待されます。



CSULBの留学生が「書道」に親しむ



自分の書いた文字を掲げ、笑顔を見せる留学生ら＝仙台大学

7月27日（月）、本学クラブハウスにおいて、本学と国際提携を結ぶ米国・カリフォルニア州立大学ロングビーチ校（CSULB）の短期留学生7名らが、日本の伝統文化に親しむことを目的に「書道」を体験しました。留学生全員にとって、初めての書道体験となりました。

講師の柴田町書道協会会長・山下龍洞氏【前列左から2人目】（読売書法会評議員／宮城県芸術協会会員）は、「書道は日本の伝統文化として、日常生活に溶け込んでいる。一本の筆で、自分の気持ちを一枚の紙に表現してほしい。太い線と細い線を組み合わせることでメリハリが付き、綺麗に見せることができる」と説明。留学生らは、慣れない筆遣いに戸惑いながらも、真剣な表情で筆を握り、「志」・「夢」・「光」などの漢字を色紙に書き写しました。

留学生のキンデル・フリーアーさん【後列中央】は、「漢字を書くのは難しかったけど、とても楽しかったです。将来、大きな夢を掴むために「夢」という漢字を書きました。将来は、メジャーリーグの球団で働きたいです」と感想と自分の夢を話してくれました。

復興願い「未来(あした)への道1000km縦断リレー2015」に本学学生も参加



左から今泉さん、伊藤さん、上野さん

7月28日（火）、宮城県南三陸町他で「未来（あした）への道1000km縦断リレー2015」（主催：東京都及び東京都スポーツ文化事業団）が行なわれ、本学からは、トライアスロン部の伊藤弘夢さん（健康福祉学科2年一栃木・上三川高校出身）・今泉啓太さん（健康福祉学科2年一青森・田名部高校出身）・上野歩さん（健康福祉学科2年一岩手・釜石高校出身）の3名が参加しました。本学の学生たちは、気仙沼市立階上小学校から南三陸森林組合までの約30kmの自転車区間を走行。一般の参加者から受け取ったタスキを上野さんのアシストのもと伊藤さん・今泉さんへと繋ぎ、次の区間の参加者へと送りました。

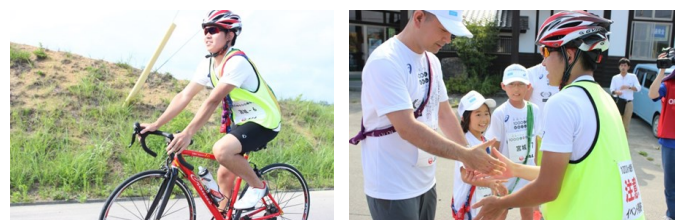
1000km縦断リレーは、東日本大震災からの復興をスポーツの力で支援することを目的として行なわれており、一昨年に続いて、3回目の開催。青森から東京までの約1,200km・162区間を15日間かけてタスキを繋いでいくリレー形式で行なわれ、ランニングまたは自転車で走行します。

中継所では、多くの地元の方やスタッフに迎えられ、参加した3名は「気持ちよかった」「達成感があつた」と充実した表情で語ってくれました。

本学からは、昨年、公園等を会場とする「ふれあいランニング」という区間に学生・教職員ら約25名が参加したものに引き続き、今年は、自転車区間にトライアスロン部の3名の学生が参加しました。被災地にある体育大学として“東日本大震災からの復興をスポーツの力で支援”という趣旨のこのイベントに本学も貢献ができたのではと思います。

青森からスタートし引き継がれたタスキは、仙台・福島・茨城・千葉を経由し、8月7日（金）にシンボルプロムナード公園（東京都江東区・青梅）にゴールする予定です。

<報告：文・笹原聖大職員、写真・溝上拓志新助手>



「平成27年度一般社団法人 仙台大学同窓会社員総会」を開催



仙台大学同窓会社員総会の様子=仙台大学

7月4日（土）、本学管理研究棟（A棟）2階大会議室で、本学同窓会が社団法人化してから初となる「平成27年度一般社団法人 仙台大学同窓会社員総会」が開催されました。北は北海道から南は沖縄まで、18支部の支部長または事務長がご出席下さいました。

本学同窓会本部からも鈴木省三代表理事、佐藤久・安部俊三の各顧問、小関章・半澤和茂らの各理事などが出席。総勢35名が参加し、活発な議論が繰り広げられました。社員総会では、大河原事務局長の司会のもと、鈴木代表理事の挨拶に続き、平成26年度事業報告並びに平成27年度事業計画（案）について協議がなされました。2年連続全国大会に出場した硬式野球部への支援助成については、同窓会が一部負担することです承。前年度からの懸案事項であった奨学金については、貸与条件等の具体案が示され、承認を求めたところ全会一致で可決されました。また、「第一回還暦同期会」や「同窓会オリジナルグッズの制作」などの新規事業が提案され、積極的に推進することが決定しました。最後に小関理事より、今後の仙台大学同窓会の発展を祈念する挨拶があり、無事に閉会されました。引き続き行われた懇親会では、朴澤泰治理事長・学事顧問、阿部芳吉学長、吉田龍哉事務局長も出席。和やかな雰囲気の中、同窓生相互の交流が深められ、盛況のうちに閉会となりました。

平成27年度 仙台大学同窓生の「第16回校長職就任祝賀会」並びに「第5回宮城県・仙台市新規採用教員激励会」を開催



挨拶する熊谷校長

7月25日（土）、KKRホテル仙台で、平成27年度仙台大学同窓生の「第16回校長職就任祝賀会」並びに「第5回宮城県・仙台市新規採用教員激励会」が開催され、朴澤泰治理事長・学事顧問、阿部芳吉学長はじめ同窓生や本学関係者約80名が出席しました。

今回校長職に就任されたのは、登米市立津山中学校の熊谷良校長（第10回生）。また、宮城県・仙台市に新規採用された教諭は、築館高校の高橋佳奈教諭（第33回）ら29名。

熊谷校長からは、大学時代のエピソードや校長として新たな気持ちで学校経営に取り組んでいくとの決意が述べられ、また、新規採用された教諭の方々からは、喜びの言葉や、仙台大学出身者としての自覚・誇りを持って仕事に臨みたいなどの抱負が語られました。

本学の青沼一民教職支援センター長（元仙台市教育長）や太田四郎教授（元宮城県第二女子高校校長）らも登壇され、校長就任者及び新規採用教員に対し、激励の言葉を述べて会場を盛り上げました。



挨拶する新規採用の高橋教諭

公益財団法人 江頭ホスピタリティ事業振興財団の報告



去る7月14日(火)、公益財団法人 江頭ホスピタリティ事業振興財団の事務局長である宮浦恭子氏が本学を訪れ阿部学長と懇談をおこなった。江頭ホスピタリティ事業振興財団は「ホスピタリティ産業」の発展を通じて『ホスピタリティ』という概念が広く社会全体に定着し、多くの方が健康で心豊かな生活を送ることができることを目的に活動する公益財団法人で、ホスピタリティ産業にとって最も大切なのはそこに関係する「人」と捉え、ホスピタリティに興味を持つ学生、将来これらの産業に従事したいと考える学生、また食や食文化に興味を持つ学生に対して、人材育成の為に奨学金給付事業を行っている。

さらに東日本大震災以降、被災等により就学継続に困

難な状況にある学生を対象とする「特別」奨学金給付事業も行っており、本学学生も2011年以降奨学生を数名ずつ採用していただいている経緯がある。本年度も、新規で2名(3年生1名、2年生1名)の学生が奨学金を受給している。

阿部学長との懇談後、学内を見学され宮浦事務局長自身も栄養大学系卒業で管理栄養士の資格を持っており、運動栄養学科の栄養サポート関係事業については、非常に興味を持たれ、さらには体育大学らしい取組み(AT関係、トレーニング施設関係そして栄養関係、さらにはスポーツの映像・分析などの関係を上手く組み合わせている取組・環境)には感心していた。

同日、午後には仙台市内のレストランにおいて、江頭ホスピタリティ事業振興財団から奨学金の支援を受けている東北地方の学生が一堂に会し懇親会が行われた。平成27年度の受給学生は全国で66名、東北地方では半数の33名。

内、懇親会出席学生は本学の2名も入れて16名で、近況報告やら新規奨学生の紹介等がおこなわれ、提供されたお料理(フルコース)を頂くと共に、他大学に通う学生達(奨学生仲間達)と和気あいあいと過ごした。

<報告: 学生課長 川村 昭宏>

佐伯洋昌元教授が教職47年を振り返る本「なでしこ」を発行



平成23年3月に本学を退職され、平成25年11月に「瑞宝双光章」を受章された佐伯洋昌元仙台大学教授が、教職47年を振り返る本「なでしこ」を発行されました。

広報室で「なでしこ」を1部保管しておりますので、閲覧を希望される方は、広報室まで申し出て下さい。

平成27年度新任者紹介 挨拶(平成27年7月1日付)

内野 洋材 新助手
(AT)



7月1日より、新助手として採用頂きました内野洋材(うちの・ひろき)と申します。アメリカでNATA-ATCの資格を取得後、アメリカンフットボールやバスケットボールのチームで働いておりました。初めての大学職員としての勤務となりますので、不慣れなことも多くあるかと思いますが、皆様のご教示を受け賜りながら全身全霊をもって本学に貢献できるよう努めて参ります。また、以前ハワイ大学に学生として籍を置かせていただいたこともあるので、同大学と密接な関係を持つ仙台大学で働かせていただけることを大変光栄に思います。両校のアスレティックトレーニング分野における更なる発展の一助となれるよう頑張ります。勤務地は船岡ATルームとなります。今後とも何卒よろしくお願いいたします。

リコーインダストリー(株) 仙台大学を見学



7月28日(火)リコーインダストリー株式会社 安全衛生委員会の8名が学内見学をされました。リコーインダストリーとは平成24年に「社員の生活習慣改善」を目的に契約を結び、レクリエーションやメンタルヘルス等の教室を行ってまいりましたが、今回「フィジカルイベントの更なる向上を目指し、仙台大学がどのような技術やノウハウを持ち、又、支援を頂けるのか見学を通し検討したい」との要望を受け、学内見学を開催する運びとなりました。当日は、体力測定室や高圧高酸素室を見学され、又、ATルームでは、鈴木のぞみ新助手、トレーニングセンターでは、白坂牧人新助手から施設等の説明を頂きました。参加した皆さんは、本学の充実した施設に驚かれ、色々な取り組みに対しても大変興味を持って頂きました。

その後、本学の実行委員長である弓田講師を交え打ち合わせを行い、今後とも協力し事業を推進して行く事を確認しました。



<報 告：スポーツ健康科学研究実践機構
石川 美香>

栄養士から管理栄養士への道筋・・・その一事例

全栄協月報第658号掲載（平成27年7月25日）発行

想 い

栄養士から管理栄養士への道筋・・・その一事例

仙台大学理事長
理事 朴澤 泰治

この度、全栄協月報「想い」への執筆のご依頼を頂戴しましたので、地方の四年制小規模私立大学の運営に携わっている身として、設置している栄養士養成施設における人材育成に関し、日頃、「想っている」ことを書かせて頂こうと、まずは、全国栄養士養成施設協会事務局に四年制大学における栄養士養成の現状を確認してみました。

執筆時点では、四年制大学で栄養士養成を実施しているのは全国で18大学に過ぎないこと、そのうち、何らかのかたちで管理栄養士養成施設を併設している大学は14大学に上り、栄養士養成施設のみを設置は4大学だけであること、その4つの大学は国立・私立がそれぞれ2大学となっていること、所在は東北に2大学、関東と九州・沖縄にそれぞれ1大学であること、男女共学の大学が3大学、女子学生のみが1大学となっていること、ちなみに18大学のうち12大学が女子学生のみであること、などを改めて確認しました。

これからすれば、協会理事としての執筆という位置づけではありますが、実質的には、正会員数263施設(27年3月末現在)のうちの4大学、構成比で1.5%弱の立場からの「想い」、ということになってしまいます。

また、弊職の所属大学はスポーツ健康科学系を教育研究領域としておりますが、栄養士養成を実施している18大学のうち、管理栄養士養成と栄養士養成とをそれぞれ学部を異にして実施され、具体的な内容は後述しますが、栄養士養成施設を併置されている学部・学科の人材育成理念が弊職の所属大学と類似するスポーツ健康科学系に立脚しておられるという大学も、一つ存在していることを確認しました。この観点から言えば、263施設のうちの僅か2施設の立場からの協会理事の「想い」、ということになってしまいます。

しかし、栄養士という名称独占の国家資格付与を付託されているという共通項の

— 1 —

なかで、たとえ2施設であっても複数の養成施設が同一方向の理念の下に人材育成という責務を遂行しているという事実を踏まえると、以下に記します「想い」は、人口減少高齢社会が到来した日本をこれから担わなければならない人材の育成ということにおいて、必然となる多角的・多面的な視点に立った育成方策の推進ということに対して、議論の何らかの糸口になるのではないかと考えております。そして、担い手が少なくなる一方、という現状の日本社会におけるこの種の育成方策の推進という視点は、全養成施設の共通認識となり得るものであり、この意味では、より多くの立場を踏まえた協会理事の「想い」にも止揚されるのではないかと、期待している次第でもあります。

「想い」は、栄養士の役割と、これを踏まえた管理栄養士への道筋についてでありまして、具体的な事柄としては、四年制大学で栄養士資格を取得した卒業生が、大学卒業後の「1年間」と見做される実務経験により、管理栄養士試験の受験資格を取得するという、「現行制度の維持」であります。

弊職の所属大学と同一方向の理念の下にスポーツ健康科学系に立脚した栄養士養成を実施されている他の施設(大学)は、その人材育成の理念や背景・目的などを明快に公表しておられますので、まず、同大学のHPの記載内容をお借りして、少し長くなりますが、その理念内容を紹介すべく引用させていただきます。

人材育成の方向として、「栄養学をベースに、運動や健康づくりに関連する知識を習得し、さまざまな現場で実習を重ねて、将来、スポーツ栄養士として活躍できる実践力を養います。」とされ、その背景や目的として、「競技者・監督・コーチ、トレーナー、競技団体などのスポーツの現場から、競技者の栄養・食事にに関する自己管理能力を高めるための栄養教育や食環境の整備等にいたるまで、栄養サポートに対するニーズは高まっています。これらは、日本代表といったトップアスリートからジュニア層、健康増進を目的としたスポーツ愛好家まで多様な層で求められています。チームや団体内においては、チーム医と同様、監督、コーチ、トレーナー、医・科学の各専門分野のスタッフ(スポーツドクター、運動生理学、バイオメカニクス、スポーツ心理学など)と連携し、栄養面からの専門的なサポートを行うことが必要です。公認スポーツ栄養士は、これらの現場のニーズに的確に応えることのできるスポーツ栄養の専門家であり、公益社団法人日本栄養士会および公益財団法

— 2 —

人日本体育協会の共同認定による資格です。」と示しておられます。言うまでもなく、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催国としても、今後、重要な分野であります。

さて、ここで、「想い」の焦点は、「公認スポーツ栄養士」であります。実は「公認スポーツ栄養士」は、現状では、管理栄養士を対象とする認定資格となっております。

「健康」の三要素として「運動」「栄養」「休養」が挙げられますが、スポーツ健康科学系四年制大学の栄養士養成施設では、2年間の修学で取得できる栄養士資格に着目し、名称独占の国家資格保有者に相応しい栄養士養成教育を実施するとともに、4年間という就学期間を活用し、一日でも早く「スポーツ」という事象を理解し、そのうえで運動・スポーツ分野などに就業してもらうため、スポーツ健康科学に関する豊富な知識技術の習得を促しております。

栄養士法は「栄養士の名称を用いて栄養の指導に従事することを業とする者」を「栄養士」と云う、としておりますが、さて、「公認スポーツ栄養士」は、栄養指導面のプロである栄養士であると同時にスポーツ事象にも通じた栄養士ではなく、何故、管理栄養士でなければならないのでしょうか。

カリキュラム上では、平成14年4月1日施行の改正栄養士法を踏まえ、管理栄養士養成では、「専門基礎分野」としての「社会・環境(人間や生活)と健康」、「人体の構造と機能、疾病の成り立ち」、「食べ物と健康」の各教育分野に加え、「専門分野」としての「基礎栄養学」、「応用栄養学」、「臨床栄養学」など臨床栄養を中心とした教育分野が拡充される一方、栄養士養成でも、「社会生活と健康」、「人体の構造と機能」、「食品と衛生」、「栄養と健康」、「栄養の指導」、「給食の運営」といった栄養職種に関するプロとしての各面の教育が施されることになっており、栄養士は、運動・スポーツ分野においても十分に就業できるような栄養面に関する資質を備えているものと考えられます。

「公認スポーツ栄養士」は、行政的には厚生労働省と文部科学省の共管の意味合いの認定資格と考えられますが、結論的に考えれば、これらからしても、なお「管理栄養士」でなければならないということであれば、これは制度的枠組みの事柄である、と考えることが得心的姿勢ということになります。

— 3 —

そこで、いよいよ「想い」の具体的な事柄である上述の「現行制度の維持」ということとなります。四年制大学で栄養士資格を取得した卒業生が、卒業の年の翌年の3月には管理栄養士試験を受験できる、すなわち、大学入学後5年で受験資格が得られるという現行制度の維持であります。

一日も早く「公認スポーツ栄養士」として、オリンピック開催という国家施策に寄与したい、という学生の声は多く聞こえてきます。その実現のためには一日も早く管理栄養士資格を取得しなければならず、資格取得の機会を一日も早く得たいという、大学4年間の就学期間を活用し名称独占の国家資格たる栄養士資格を保有すると同時にスポーツ健康科学に関する豊富な知識技術を保有する、次代を担う世代の声であります。一か月に満たない期間を対象とする試験期日の変更が実質的には1年間という膨大な時間を更に付加する結果となるという制度変更は、オリンピック開催という国家施策の共同遂行という視点から見ても、得策とは言いきれないものと考えられます。

栄養士法では、栄養面の高度なプロとしての管理栄養士の職務について、①傷病者に対する療養のため必要な栄養の指導、②個人の身体状況、栄養状態等に応じた高度の専門的知識及び技術を要する健康の保持増進のための栄養の指導、③特定多数人に対して継続的に食事を供給する施設における利用者の身体状況、栄養状態、利用の状況等に応じた特別の配慮を必要とする給食管理及びこれらの施設に対する栄養改善上必要な指導、等を業として行う、としております。

このうちの②の職務については、オリンピック代表選手に対する栄養指導などを含め、運動・スポーツ分野などにおける就業がその典型的な職務例と捉えることもできると考えます。

このような観点からも、また、人口減少高齢社会の日本において、希少価値となった次代を担う世代に対する多角的・多面的な視点に立った人材育成方策の推進の観点からも、栄養士から管理栄養士への道筋において、「オリンピック開催その他、時代の要請に間に合うように一日も早く管理栄養士に」という声に響いているところであり、管理栄養士試験の受験に関する「現行制度」は、今後も維持されなければならない、と常々「想う」次第であります。

そして、この「想い」は、より多くの立場を踏まえた協会理事としての「想い」に止揚していると「想いたい」ところであります。

— 4 —

男子サッカー部、DF榎本滉大選手がベガルタ仙台の特別指定選手に

えのもとこうだい
6月24日（水）、本学男子サッカー部のDF榎本滉大選手（体育学科3年一群馬・共愛学園高校出身／身長183cm・体重73kg）がベガルタ仙台の特別指定選手に承認されました。

特別指定選手とは、大学に所属しながら、Jリーグのクラブにも登録され、公式戦に出場できる選手。本学男子サッカー部からは、これまでも、OB細川淳矢選手（現J2水戸／平成19年体育学科卒一埼玉・武南高校出身）・OB奥埜博亮選手（現J1仙台／平成24年体育学科卒一宮城・明成高校出身）・OB蜂須賀孝治選手（現J1仙台／平成25年体育学科卒一群馬・桐生第一高校出身）らが本学在学中に特別指定を受け、卒業後はJリーグ入りを果たしました。

榎本選手に今の心境や今後の抱負などについてお話を伺いました。

今の心境は—

小さい頃からJリーグでプレーすることが夢だったので、その目標に一步近づけたことはとても嬉しいです。これまでご指導・応援・支えて下さった方々への感謝の気持ちを忘れず、一生懸命努力し、日々成長していきたいと思います。

課題は—

プロは全てのスピードが速いので、慣れるのに必死です。また、球際で当たり負けするなどフィジカル面での差を感じています。筋力トレーニングでフィジカル面を強化し、体力アップを図りたいと思います。食事は常に気をつけていますが、さらにバランスの良い食事を心がけていきたいです。



ベガルタ仙台の特別指定選手に承認された榎本選手II仙台大学サッカー場

今後の抱負は—

まずはベンチ入りして、早く試合に関わっていきたいです。チーム（ベガルタ仙台）も自分をチームの一員として認めてくれているので、自信を持って積極的にプレーしていきたいです。

あくまで自分はまだ大学生です。ベガルタ仙台で経験してきたことを仙台大学男子サッカー部に少しでも還元できるよう努めていきたいです。

河北レガッタ—男子エイト仙台大Aが制す



男子エイトを制した仙台大A＝宮城県長沼ボート場

7月12日（日）、気温30℃を超える暑さの中、宮城県長沼ボート場（国際A級公認コース）で「第24回河北レガッタ」の決勝が行なわれ、一般・大学男子エイトを仙台大Aが6分03秒27で制しました。2位は東北大、3位は仙台大B。仙台大は、同種目で4年連続優勝を果たしました。

はやしかんや

本学漕艇部（男子）の林緩哉主将（体育学科4年一島根・松江東高校出身）は、「優勝は素直に嬉しいです。一段とレベルの高いレースが繰り広げられるインカレ（8月）に向けて、ローイングテクニックとクルーの一体感を高めていきたいです。インカレでは、表彰台を目指します」と力強く話しました。

今大会には、柴田町ボート協会の皆様が応援に駆け付け、大きな声援を送って下さいました。同協会の児玉裕雄会長は、「一糸乱れぬ応援ができた。男子エイトで2艇が出場できるという仙台大の選手層の厚さを感じる。8月のインカレにも必ず応援に行き、選手たちを後押ししたい」と激励の言葉を話されました。

引き続き、仙台大学漕艇部への熱い応援をよろしくお願い致します。

軟式野球部、2年連続4度目の全国へ一上位進出を目指す



全国大会に向け、打撃練習に励む橋場主将
＝並松運動場（柴田町船岡）

全日本大学軟式野球東北地区代表決定戦が6月11日（木）仙台市民球場（仙台市宮城野区）で行なわれ、本学が8－7で東北大学に逆転勝ちし、2年連続4度目の優勝を飾りました。

本学は、「第38回全日本大学軟式野球選手権大会」【8月15日（土）～19日（水）：長野オリンピックスタジアム他】への出場を決め、初戦は白鷗大学（北関東）【8月15日（土）11時30分～中野市営野球場】と対戦することになりました。

チームを牽引する橋場万寿男主将（体育学科3年一北海道・北海学園札幌高校出身）は、「エースはしばますお 櫛引哲生（体育学科3年一青森・大湊高校出身）ら投手陣の出来が勝敗を分ける。継投を含めて投手陣が踏ん張り、いかに失点を少なくするかがポイントくしびきてつおになる。打撃は4番・田中拳輔（健康福祉学科3年一福島・田村高校出身）が勝負強いバッティングでチームを引っ張っている」「今回で4度目の全国。初勝利を必ず掴み取り、上位進出を目指す」と力強く話し、全国大会での活躍を誓いました。

仙台大学軟式野球部への熱い応援をよろしく願い致します。

陸上競技部、佐々木琢磨選手（健康福祉学科4年）が「日本聴覚障害者陸上選手権」の100mと200mを自己新で制す

練習に取り組む佐々木選手 II 仙台大学陸上競技場



7月18日（土）、正田醤油スタジアム群馬（群馬県前橋市）で、「第12回日本聴覚障害者陸上競技選手権大会」ささきたくまが行なわれました。本学陸上競技部の佐々木琢磨選手（健康福祉学科4年一岩手・盛岡聴覚支援学校出身）が100mと200mに出場。2種目で自己ベストを更新（100m 10秒88／200m 22秒51）し、見事優勝を果たしました。佐々木選手は、5歳頃から両耳に重度の聴覚障害を持つアスリート。普段は、手話と口話の2つを用いてコミュニケーションをとっています。大会の感想と今後の課題、抱負について佐々木選手にお話を聞きました。

優勝した時の心境は—

3年ぶりに自己ベストを更新することができ、とても嬉しかったです。大学1年の頃から怪我が多く、自分が思っているように練習できない時期もありましたが、諦めずに競技を続けてきた成果だと思っています。



課題は—

50mからの走りに課題が残りました。左足の地面を蹴る力が弱いので、右足への負担が大きく、疲れが溜まりやすいです。左右の足の使い方のバランスを意識しながら、効率の良い練習を心がけていきたいと思っています。

今後の抱負は—

「第49回全国ろうあ者体育大会in京都」（9月19日・20日）で、10秒6を出したいです。また、「第8回アジア太平洋ろうあ者競技大会」（10月1日～11日／台湾・台北）に出場し、好成績を収められるよう練習に励みたいと思います。応援よろしくお願ひします。

女子サッカー部、加賀孝子主将と須永愛海選手がユニバで銅メダルを獲得



加賀主将と須永選手のユニバ銅メダルを喜ぶ女子サッカー部
＝仙台大学サッカー場

“大学生の五輪”と言われる「ユニバーシード競技大会」が韓国・光州で開催され、女子サッカー日本代表チームは3位決定戦（7月12日）でカナダを5－0で破り、見事銅メダルを獲得しました。

本学から同大会に出場したMF^{かがこうこ}加賀孝子主将（ユニバ女子サッカー日本代表主将）【写真前列右から3人目】（スポーツ情報マスメディア学科4年－ジェフユナイテッド市原・千葉レディース出身－宮城・聖和学

^{すながまなみ}園高校出身）とDF須永愛海選手【写真前列右から4人目】（体育学科3年－JFAアカデミー福島出身）は、全6試合に先発出場を果たし、得点を決めるなどの活躍を見せ、銅メダル獲得に大きく貢献しました。

「メダルを獲れて良かったのですが、金を狙っていたので悔しい。ラストパスなど一つひとつのプレーの質を高めていきたい。最後のインカレでは、満足のいく結果を残したい」（加賀主将）。「嬉しさ半分。悔しさ半分。1対1で負けないフィジカルの強化とプレーの精度を高める必要性を感じた。ユニバの経験をチーム（仙台大）に生かしていきたい」（須永選手）。

同大会のコーチとして帯同した本学女子サッカー部の黒澤尚監督は、「二人には、プレーだけではなく人間性やコミュニケーション力の重要性をチームに示すことによって、自主性・自己決定力の高い組織になっていくような相乗効果を期待している」と話しました。